

安政七年申三月廿七日

紀伊守宅上松平肥前守家来旨出二後書付

松平肥前守

帰國之義致し致し有し舟経是を勝日次身より以て

又 御所治し致し有し令收治身登

城地し上考是より下と成り事

二り廿七日

松平肥前守

は紐下後休より西丸に之を仕立居るに之を達し之を不使  
る出仕細事成中其後相承御所治し致し有し



備より少く長島へ快復出仕て長洲、中へ旅へ出  
石の心事は概ねの如く出立ぬる法持て長崎表  
船を来外國貿易の在完に付て新規の山を至り  
以上唐國領争の風俗もあ聞ひ給ふ法筋形要の如  
柄とて年々尚年々も有て退く由立付る後迄も  
こり不幸此後と余取らば其紙と年々其條長言と相  
居下りし方故今此方貴是と長崎表の如く長崎向ふ  
船難半一指揮とて其事

三月海

右紅印守定とて京來呼海

美延元年庚申四月二日

松平阿波守

内海島監法

作付伊敷山下の基礎場山取に取ら防衛あり  
若くは重くの如く付の依り羽田大森の基礎場と  
を御免と成んむ内海島監法と而して  
今也

右於橋とる者申列に對馬守中瀬

別紙の達字

此度内海島監法と作付伊敷山下の基礎場山取